

[寄稿論文]

メディアとしての暦*

——朝鮮・台湾・インドネシアにおける元号と皇紀——

中 牧 弘 允**

1. はじめに

2019年5月1日に改元が予定され、それに先立ち4月1日には新元号が公表されることになった。今上天皇の譲位にともなう新天皇の即位の日が「国民の祝日」になると同時に、1979年に制定された元号法による「一世一元」の原則を踏まえた改元がおこなわれる。平成は4月30日をもって終了する。

この元号について皇紀（神武天皇即位紀元）とともに「情報人類学」の視座から考察することが本稿の目的である。対象とする時期と地域は戦前・戦中・戦後の朝鮮・台湾・インドネシアである。

情報人類学という用法は奥野卓司氏によって提起され、情報社会を研究対象とする文化人類学の一領域であると定義されている（奥野，2009：3）。情報人類学に先行する「コンピュータ民族学」や「民族情報学」は国立民族学博物館を基盤として形成された学問領域であり、世界各地の民族社会を主要関心領域に設定している。それに対し、情報人類学は現代の情報社会ないし情報メディアを主たる対象として構想されており、グローバル化する社会における伝統文化の保存や融合、さらには発信をめざしている（奥野，2009：2, 5）。

暦の世界では、太陽暦の西暦が地球規模でグローバル化する一方、ヒジュラ暦（太陰暦のイスラーム暦）や太陰太陽暦のヒンドゥー暦（インド）や農暦（中国）も健在である。さらに太陰太陽暦のユダヤ教暦や太陽暦のエチオピア暦もあれば、同じイスラーム圏でもイラン暦のように伝統的な太陽暦も存在する。

これらの暦は単独で使用されると同時に、国や地域によって、あるいは時と所に応じて、使い分けられることが特徴である。人びとの生活は二重、三重の暦をふまえて組み立てられている。バイカレンダー、マルチカレンダーは暦文化の顕著な特徴であり、文化の共存や融合を考える格好の対象となっている。その意味で、情報人類学の研究対象としてもふさわしい素材といえる。

暦は情報社会においても時計とともに時間の「OS」の主役であることに変わりはない。コンピュータのOSとしてはMacやWindowsが普及しているが、クラウドというのもあり、それぞれに特性が異なる。暦も同様に、西暦が主流ではあるが、対抗する暦法に歴史や文化が付随し、生命力を維持している。暦文化は一樣ではなく、民族文化の多様性に通じるところもある（中牧編，2017）。暦の普遍性と特殊性は現代文化のそれを検討するひとつの指標にもなりうると考えられる。なぜなら、普遍的なグレゴリオ暦に対する特殊な暦群が存在するからである。

*キーワード：暦、元号、皇紀、メディア、情報人類学、朝鮮、台湾、インドネシア

**国立民族学博物館名誉教授

2. メディアとしての暦

暦は時間情報を伝達するメディアのひとつである。情報のコンテンツは年月日を中心とし、週や旬、十二宮や干支などを包含するものである。年月日には往々にして吉凶があり、人々の行動様式に決定的な影響をあたえる。吉凶の判断には占星術や陰陽五行説、あるいは風水説や識緯説などが援用され、地域的・文化的に複雑な様相がみられる。最近ではコンピューターを使った占星術がインドをはじめ世界的な流行をみせている。

メディアとしての暦は古くさかのぼれば自然暦とよばれる季節の推移に関する認識もあれば、ある種の装置をつかった天体観測にもとづくものもある。自然暦は動物の移動や植物の成長、あるいは雪形と称する残雪の形などをメルクマールとしていた。他方、天体観測は月の満ち欠けや日の出・日の入りはもとより、星座の出現などにも注目していた。とりわけ月の朔望からは29日ないし30日の周期がみちびきだされ、日の出・日の入りからは365日周期の年が認識されるようになった。こうして暦が誕生し、粘土や木、あるいは岩石や金属に記録された。のちに紙やコンピューター画面に表示されるようになったことは言うまでもない。

暦はすでに採集狩猟時代にはじまり、スコットランドのウォーレンフィールドの遺跡には月の満ち欠けをあらわすと思われる12の穴が弧状に配置されている（中牧，2019：21-23）。太陽の動きについては、ホライズン・カレンダーと総称される、地平線や山稜に出入りする太陽を定点観測する方法があった。また環状列柱や環状列石などをもちい、冬至と夏至の振幅を認識するようにもなった。イギリスのストーンヘンジはそのもっとも有名な例であり、日本にも能登の真脇遺跡や秋田の大湯遺跡にその例がある。

月の朔望のみでつくられる暦が太陰暦であり、太陽の回帰年にもとづく暦が太陽暦である。太陰太陽暦は月と年の周期を閏月の挿入によって調整する暦である。太陽暦は古代エジプトで誕生し、30日の月を13回もうけ、それに5日をくわえて1年＝365日とした。太陰太陽暦は19年に7回の閏月をもうけ、1年を354日（ないし355日）とし、閏月の時には1年が383日から385日となった。太陰太陽暦は古代中国、古代インド、それに古代メソポタミアで発達した。他方、純粋な太陰暦の12ヵ月を1年とする354日（ないし355日）の暦は7世紀のイスラームの登場を待たねばならなかった。

古代のマヤやアステカにも独特の暦が存在した。260日周期の暦とカレンダー・ラウンドとよばれる1周期が18,980日＝52年の暦である。前者は20日周期と30日周期の組み合わせからなる暦である。後者は365日（20日×18ヵ月＋5日）の太陽暦に近い暦法であるが、閏日や閏月、閏年はない。いずれも20進法が基本である。

暦は時間に関する情報を認識し共有するために誕生した。その時間情報は採集狩猟や農耕に役立てられるだけでなく、土木・建設作業にも不可欠だった。さらに、支配や統治の道具として暦は大いに活用された。それは政治的な事柄から経済的・文化的な分野まで、広い領域をカバーした。王の支配や王朝の系譜を記憶し記録するためにも暦は必要だった。古代マヤの暦は暦元の日を定め民族の長い歴史をしるすことができた。それはまた、占いにも使われた。マヤ暦にはいくつかの紀年法があるが、基本には5000年を超える周期の長期暦を中心に据えていた。他方、古代中国では殷の時代にすでに干支がつかわれ、60年サイクルの紀年法が存在した。さらに、漢の武帝のときに年号が誕生し、干支と年号の組み合わせで歴史をしるすようになった。江戸時代までの日本も同様である。

3. 紀年法の種類—短期と長期、循環と直線

中国の干支もマヤの長期暦も循環的紀年法である。これに対し、年号は、期間が相対的に短い直線的紀年法である。一方、キリスト生誕紀元は長期的・直線的紀年法であり、紀元前という数え方を導入したこ

とで過去と未来に無限に拡大できるようになった。日本では西暦と通称されるが、韓国では西紀、中国や台湾では公元、西暦、西元とよばれている。

キリスト生誕紀元に対峙する長期的・直線的紀年法には仏陀入滅紀元（仏紀、仏暦）、孔子誕生紀元（孔紀、孔暦）、イスラームのヒジュラ紀元やユダヤ教の天地創造を紀元とする創造紀年法のような宗教的紀年法がある。その一方、初代の帝王の即位にもとづく中国の黄帝紀元（黄紀）、朝鮮の檀君紀元（檀紀）、日本の神武天皇即位紀元（皇紀）などもある。また政治的な建国を紀元とする台湾の民国暦や初代国家主席の生誕を紀元とする北朝鮮の主体年号のようなものも存在する。古くは、たとえば古代ローマでは BC 776 年に開催されたオリンピック競技会を紀元とするオリュンピア紀元が使われていた。このような長期的・直線的紀年法は数多く指摘することができる。

本稿では元号と皇紀を問題とするが、それらは直線的紀年法に属し、前者は短期的、後者は長期的という特徴をもつ。それらと組み合わせて干支という循環的紀年法も使用されてきたが、干支を主題とはしない。

また、年号の誕生や日本における年号の歴史についても既存の書物や他の論文にゆずり、明治改暦についても最小限の言及にとどめたい。というのも、本稿がめざすのは日本統治下の諸地域で元号や皇紀がどのように使われ、いかなる意味をもっていたかを情報人類学的視座から提示してみたいとおもうからである。

4. 朝鮮における元号と皇紀

日本統治時代の朝鮮における「官暦」の普及については先行研究を知らない。「官暦」とは東京天文台（それまでは内務省地理局）が編纂し、神宮司庁（神宮教、神宮奉斎会、神部署、神宮神部署）が頒暦になったところの暦を指す。本稿では「官暦」とは異なる引札カレンダーや日めくりをとりあげる。

日本統治時代と終戦直後の暦については、韓国の国立民俗博物館が所蔵する資料の画像の提供を受けた。対象とする資料は6点であり、どのような情報が盛り込まれているか、まず資料毎に整理を試みることにする。

資料 1. 1926 年の壁掛けカレンダー

壁掛けカレンダーで上半分が広告、下半分が横書きの月表 12 枚となっている。赤と黒の二色刷であり、日曜日と祝日は赤で表現されている。記載されている主な情報は以下のとおりである。

広告

高麗人參之粹精 久松人參精
朝鮮人參 補血強壯滋養靈劑
京城府西小門町
合資会社 久松人參製劑所
振替京城四四九四番
コーマシン

Health First

The substitute of cigarette

月表

神武天皇即位紀元 2586



写真 1 1926 年の壁掛けカレンダー（韓国国立民俗博物館提供）

一月

西暦 1926

金、土、日、月、火、水、木の横並び

1日 四方拝

3日 元始祭

5日 新年宴会

旧暦の日付も記載

皇紀と西暦が併用されているだけで、元号はみあたらない。干支の表示もない。実際は、大正15年の丙寅である。とはいえ広告の裏側、つまりカレンダーの表紙に元号や干支が記載されている可能性がある。干支の図柄もあるかもしれない。

日にちはアラビア数字で表記され、その右隣に漢字で旧暦の日付がある。内地でも一枚物の略暦などには旧暦の記載が黙認されていたので、朝鮮独特とはいえない。朝鮮の人々は旧暦を使い続けていたので、便利だったにちがいない。

ハングル文字がまったく使用されていないことも注目される。そのかわり、カタカナ表記が見られ、英語まで使われている。久松人参製剤所が内地から進出した進取の気性に富んだ会社であることが大きな理由であろう。

資料2. 昭和6年、1931年の日めくり

この日めくりの表紙と2月12日の日表に書かれている主な情報は以下のとおりである。

表紙

昭和6年

謹賀新年

松竹梅の図柄

1931

日表

12

木 (THURSDAY)

小 二月十二日

旧 十二月廿五日

つちのえ 戌 五黄 赤口

サッポロビール

前頁

2月11日 紀元節 旗日の赤印



写真2 昭和6年(右)と皇紀2596年(左)の日めくり(表紙)
(韓国国立民俗博物館提供)



写真3 昭和6年(右)と皇紀2596年(左)の日めくり(日表)
(韓国国立民俗博物館提供)

元号と西暦の記載はあるが、皇紀と干支は載っていない。皇紀は2591年であり、干支は辛未の年にあたる。ただし、日にちには干支が用いられ、九星と六曜の配当がある。新暦と旧暦の日付が左右対称に配置されている。頒布しているのはサッポロビールであり、ひらがなとカタカナの表記がみられることから、朝鮮仕様とはかんがえにくい。また、曜日を英語で表記しているので、「鬼畜米英」を合言葉に英語を駆逐した時代がまだ到来していないことも示している。

資料 3. 2596 年の日めくり

写真 2, 3 の左側の日めくりは 1936 年、つまり昭和 11 年のものであるが、表紙には皇紀しか載っていない。ネズミが描かれているものの、西暦と元号はまったく無視されているようだ。主要な記載事項は以下のとおりである。

表紙

賀正

ネズミ（子）と打出の小槌

2596

日めくり

24

金曜日

大 一月二十四日

旧 一月一日

きのとみ 六白 先勝

この日めくりも朝鮮仕様のものとは考えにくい。それにしても、西暦はまだしも、昭和の元号がなく、皇紀のみとしたら、めずらしい部類に入るかもしれない。



写真 4 皇紀 2595 年のカレンダー
(韓国国立民俗博物館提供)

資料 4. 皇紀 2595 年、西紀 1935 年の一枚物カレンダー

曜日が縦組みの配列になっているカレンダーで、西暦ではなく「西紀」を使用している。朝鮮仕様かどうかは判別しがたい。主な記載事項は以下のとおりである。

皇紀 2595

五月

西紀 1935

曜日は漢字とローマ字

日付は縦組みのアラビア数字

1 日が水曜日なのでそこからはじまる

日曜日は赤

週日は青に白抜き

旧暦や祝日の表示もあるはずであるが、文字が小さくて判読不能である。5 月のひと月分の月表なので、1 年分がどのようなになっていたか知りたいところではある。

資料 5. 1937 年の日めくり付カレンダー

すこし謎めいた暦である。台紙とおぼしきところには 1937 の数字があり、日めくりのような日表には 28 の数字の下に月曜日と見える。だが、1937 年の 4 月 28 日は月曜日ではなく水曜日である。小の月 4 月 28 日で旧暦 4 月 3 日とあるから、1937 年前後でそれにあたる年を探してみると、1941 年しかない。その日は丙丑、四緑、赤口であり、



写真 5 1937 年のカレンダー (韓国国立民俗博物館提供)

ほんやり見える文字もそれを示している。どうしてそのようなことになったのか、不思議である。

太平和信連鎖店は今でいうところのチェーンストアと思われる。燕岐（ヨンギ）郡は忠清南道にかつて存在した郡で現在の公州市に隣接する。古代の百済の土地である。和信の「和」をデザインした商標の上下にはハングル文字で「値が安く良い品物はみなさまの和信連鎖店に」と書き込まれている。その一方、日表の下部には日本語で「事毎に現はせ活かせ大和魂」とある。いかにも戦中を感じさせるが、紀元の皇紀も元号の昭和も見あたらない。

ソウルの国立民俗博物館に問い合わせてもらったところ、和信連鎖店は1931年に朴興植が設立した店舗で、のちに和信百貨店となったことが判明した。1937年に地上6階、地下1階の建物が再建され、京城で最も高いビルとなった。エレベーター、エスカレーター付、屋上には電光掲示板が設置されたというから、話題の百貨店でもあった。ただし、1987年に閉鎖され、その跡地に1999年、サムスの鐘路タワー（ミレニウムタワー）が完成した。そこは市街が一望できる観光名所になっている。

1937年が和信連鎖店にとって画期的な年であることはわかったが、1941年4月28日との関連は不明のまま残されている。同年、12月8日、日本は太平洋戦争に突入する。

国立民俗博物館で皇紀が表記されたカレンダーが展示された際、そのキャプションには「日本強占期のカレンダーでは日本の皇紀になっているが、これを通して民族の痛みがあった時代を振り返ることができる」といった内容が盛り込まれたという。

資料 6. 1946 年、4279 年、丙戌のカレンダー

1945年8月15日、日本はポツダム宣言を受け入れ敗戦をむかえたが、朝鮮は日本の植民地支配から解放された。人々は禁じられていた朝鮮語で喜びを語り合い「太極旗」を作って祝賀デモに繰り出した（水野，1986:128）。本カレンダーではその様子を描いた絵が使われている。民族衣装であるチマチョゴリを着た先頭の女性が太極旗を両手に持ち、それを高く掲げて喜びを表現している。2番目も女性であるが、最後尾は男性で、やはり白衣の民族衣装（パジチョゴリ）をまとい、独特の冠帽をかぶっている。

月表の主たる情報は以下のとおりである。

1946

Jan 一月

4279 丙戌

日曜日はじまり

横組

漢字とローマ字の曜日

青で西暦の日付（アラビア数字）

赤で旧暦の日付（漢数字）

小寒 6日（十二月四日）前六時

大寒 20日（十二月十八日）后11時



写真 6 1946 年のカレンダー（韓国国立民俗博物館提供）

とりわけ檀紀が復活したことが注意を引く。他方では、昭和も皇紀も消えている。檀紀はその後、1948年の大韓民国の成立とともに正式な紀年法として採用され、1961年までつづいた。国際化ないし近代化にともない、西紀が檀紀に取って代わるのはそれ以降である。

5. 台湾における元号と皇紀

日本統治時代における暦の研究で本稿のテーマに即して特に参照すべきは游舒婷の論文（2017）である。以下、資料の事例として取り上げるのも同論文に掲載された写真に拠る。

日本暦（官暦）は神宮大麻とともに神宮教によって 1899（明治 32）年から普及しはじめたが、めぼしい成果はなく、1913（大正 2）年から頒布された「台湾民暦」が総督府の主導もあって一般には流布した（游，2017：325）。台湾民暦の特徴としては日本暦の祝祭日に加え、台湾統治の正当性を象徴する「始政記念日」と「台湾神社祭」が掲載されていることである（游，2017：326）。

資料 7. 大正 3 年の一枚刷り民間暦

台湾歴史博物館所蔵の「暦図」とよばれる一枚刷りの暦である。いわゆる略暦の類である。表題には「神武天皇即位紀元式千五百七拾四年」「大日本帝国大正参年歳次甲寅暦日圖」とある。大祭祝日のなかに「台湾始政記念日」と「台湾神社祭」が確認できる。二十四節気や各種占いの情報が事細かに載っているが、西紀の記載はないようである。民国暦も見当たらない。

資料 8. 中華民国 35 年、丙戌の光復台湾大陰陽暦

「中華民国三十五年（丙戌）」「光復台湾大陰陽暦」「台湾民暦」の表題をもつ。皇紀や元号は姿を消した。表紙に西暦の記載はないが、1946 年にあたる。終戦の翌年であり、暦自体に「光復」の二文字が冠せられている。日本統治下の台湾民暦では曜日は日、月、火、水、木、金、土と表記されていたが、こちらでは星期日、星期一、星期二、星期三、星期四、星期五、星期六と改められている。また、7 月 1 日が国民政府成立記念日とあるように、当然のことながら日本の祝日が消えている。

6. インドネシアにおける元号と皇紀

日本はインドネシアに侵攻し、1942 年 3 月から 1945 年 8 月まで旧オランダ領東インドを占領し軍政を敷いた。日本は物資や労働力の調達をはかる一方、義勇軍のような軍事組織をつくり、隣組や警防団のような民間組織を運営するとともに、民族独立の希求を部分的に支援する体制をとった。日本が降伏した 2 日後、スカルノが独立宣言を読み上げ、インドネシア誕生の産声があがった。インドネシア共和国が名実ともに成立するのは 1949 年 12 月のことである。

資料 9. 2604 年のバリ・カレンダー

バリには伝統的な月めくりの壁掛けカレンダーを発行するところが数カ所ある。そのカレンダーには多様な暦法や吉凶情報が記載され、バリ家庭の必需品となっていて、カレンダー・ルンカップ（完全カレンダー）あるいはカレンダー・トレランシ（寛容カレンダー）ともよばれている（嘉原，2017：83-85）。

そのルーツともいえるカレンダーが日本統治時代にも作成されていた。1992 年、暦の製作者である M. Kebek Sukarsa 氏が所蔵する 1943 年のカレンダーを見せてもらい、写真を撮った。ただし、皺の寄ったカレンダーであったため、画像は明瞭ではない。主要な情報は以下のごとくである。

ALMANAK 暦

(Dewasa Bali) バリ時間

1. GATSU JANOEARI 2604

Saka 1865 サカ暦

Nichiyobi AHAD

Getsuyobi SENEN

NIPPON

1. Shihoochai 四方拝

3. Genshi Sai 元始祭

5. Shinnen Enkai 新年宴会

Hari adat-adat Bali バリ伝統行事の日

Islam イスラーム

Tionghwa (Tionghoa) 中国

アルマナクの下にバリ時間とあるので、あわせてバリ暦と称してもかまわないであろう。12枚の月表から構成されていて、年には神武紀元=皇紀2604が表示され、1月が日本語とオランダ語で表記されている。サカ暦は西暦78年を紀元とするヒンドゥー暦であり、ヒンドゥー・バリとよばれるほどインドの影響をこうむった島であることがわかる。曜日は日本語のローマ字表記に加え、アラビア語系の単語が並んでいる。インドネシアの他島がイスラームの影響を強く受けていることの反映でもある。ただし、土曜日はポルトガル語系の単語である。最下部の欄外の左半分はNIPPONの項で、1月の年中行事=祝日として四方拝(歳旦祭)、元始祭、新年宴会が特記されている。その右半分にはバリ伝統行事の日、イスラームの行事、中国の行事がリストアップされている。

曜日を縦に配するこのフォーマットが基本的に戦後のバリ・カレンダーのレイアウトにもつながっている。

なお、日本の統治がはじまってすぐ紀元としては皇紀を使用するよう布告が出されている。1942年4月29日の布告第15号には「紀元は皇紀を使用すべし。本年は2602年なり。」(インドネシア日本占領期資料フォーラム編、1991:504)との文言があった。

皇紀の日付で署名されたインドネシア独立宣言文

スカルノとハッタの署名があるインドネシアの独立宣言には皇紀の日付がついている。手書きの草稿ではDjakarta 17-8-'05とあり、タイプで打った宣言にはDjakarta, hari 17 boelan 8 tahoen 05とみえる。05は皇紀2605年であり、西暦では1945年にあたる。

宣言文自体は次のように書かれている(鈴木、1977:227)。

独立宣言

われらインドネシア民族は、ここにインドネシアの独立を宣言する。権力の委譲およびその他の事項は、慎重な方法をもって最も短期間内に実施するものとする。

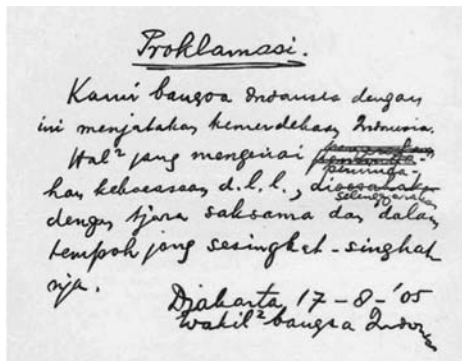
ジャカルタにおいて、05年8月17日
インドネシア民族の名において

スカルノ

ハッタ



写真7 皇紀2604年のバリ・カレンダー



Naskah asli proklamasi kemerdekaan RI yang ditemukan di keranjang sampah (Koleksi BM Diah)

写真8 インドネシア独立宣言文（草稿）

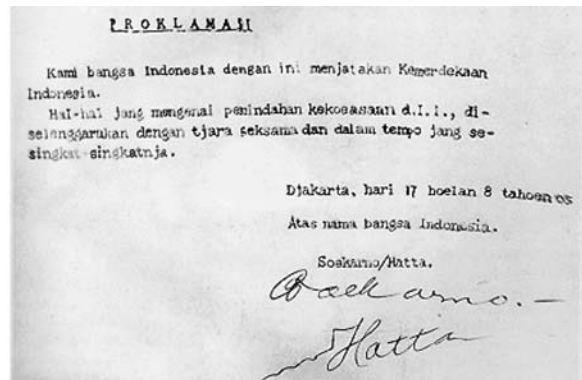


写真9 インドネシア独立宣言文

宣言文を読み上げたのはスカルノであり、後に大統領となる。ハッタは副大統領をつとめた。ではなぜ皇紀が使われたのか。西暦でもヒジュラ暦でもなく、なぜ皇紀で日付が記されたのか。

「かれらによって皇紀が無意識に使用されたことは、むしろ日本軍政による日本的なものの押しつけが、いかにきびしかったかを示しているといえる」（鈴木，1977：227）と述べる研究者がいる一方、「05年というのは、西暦を避け、日本の皇紀二千六百五年に依ったアジア・ナショナリズムの結果である」（総山，1998：63）と言い切る者もいる。判らないと言い、「たんなる習慣のためだろうか、それとも日本側をして従来のコミットメントを忘れさせない深慮からだろうか」（斉藤，1977：206）と自問自答する人もいる。

インドネシアの専門家でもない筆者には無意識的な慣習なのか意図的なナショナリズムかの判定はできないが、暦の研究者としてはポツダム宣言受諾直後において皇紀が独立宣言というような最重要案件に使用されたことの意味を紀年法という観点から問うてみたい。

日本統治時代、紀年法としては皇紀が布告されていた。昭和という元号でもなければ、干支でもなく、その組み合わせでもなかった。皇紀二千六百年の祝賀で絶頂期を迎えた皇紀がその勢いのまま占領地で使用されていたのである。それはオランダの植民地時代に使われていた西暦に対峙するものであり、350年ちかいオランダの支配に対し独立運動を展開していた集団には受容しやすいものであったにちがいない。しかも、日本は1945年3月には独立準備調査会の設置を発表し、5月には活動が開始され、共和国の憲法草案まで決定していた。さらに、7月17日には独立認容を正式に決定し、8月18日には独立準備委員会を発足させる予定でもあった。そうした過程のなかで8月15日に日本は降伏し、16日には軍政監部の西村総務部長で物別れに終わるスカルノ、ハッタらとの交渉がなされた。そして17日未明、前田海軍武官邸で熱烈な討論の末、最終文案がまとまり、午前10時、スカルノの私邸で独立が宣言されたのである。

皇紀が軍政下での正式の紀年法であったことはジャカルタから遠く離れたバリでも貫徹していた。ただし、バリ暦にはヒンドゥーのサカ暦の紀年法が副次的に掲載されていた。ジャカルタではイスラームの影響が強く、サカ暦は問題外であったろう。そのイスラームについても大統領の資格要件からはずされたことを考慮すれば、当時としては特に主張すべき紀年法ではなかったにちがいない。残るは西暦であるが、オランダ支配に抵抗してきた独立運動家たちにとっては積極的に採用する理由はなかったようだ。とすれば、必然的に皇紀ということになり、ある意味では日本軍のお膳立てで独立準備を進めてきた関係もあり、抵抗は少なかったと推測される。

いくつかの紀年法の可能性を消去し、積極的に採用する紀年法が不在のまま、日本軍政下の紀年法がさほど意識されずに「慣性的」に採用されたのではないだろうか。伝統的という意味合いでの慣習的では

なく、積極的な力学が働かず、惰性的に軍政が持続したという意味で「慣性的」にである。

資料 10. 2013 年のバリ・カレンダー

現在のバリ・カレンダーにふたたび皇紀が使われている。たとえば、Bangbang Suarte 氏の本カレンダーには ICHIGATSU 2673 とみえる。曜日にも Nichiyōbi, Getsuyōbi という記載がある。これとは別の製作者によるカレンダーには Heisei の表記もあった。このように多様な暦法のなかに日本統治時代の痕跡が残っている例はめずらしい。

SHAFAR: RABULAWAL
Jember : 1946
Arab : 1434 H

JANUARY 2013

SAKA : 1934

Sasih Kiptu, Ngumya : Kasa, Rah : 2

WINDU : KUNTARA
Pengunyan Tahun : MACAN - WRASABA
TENGGI : 1

CAP IT: GWE
CAP JI: GWE
JIM : SIEN : 2503 : 2565
TAHUN : NAGA

SIEN
GATSU
2673
2556

BUDDHA
Pari-Nibbana

MINGU KE-1 :
29. DUKUT
Kala Pati, Waspengangan,
Lunau
Bhatara Sakri

Pengunyan Bhatara Kaptara (Capitara)
17 Desember 2012
Siti Ngi : 20 Januari 2013

Kambing - Banyu

MINGU KE-2 :
30. WATUGUNUNG
Salah Wadi, Cerek Walatunggi,
Bashah Gds, Eleng
Bhatara Anantabaga

MINGU KE-3 :
1. SINTA
Salah Wadi, Cerek Walatunggi,
Bashah Gds, Eleng
Bhatara Yemadigati

MINGU KE-4 :
2. LANDEP
Salah Wadi,
Bashah Cern
Bhatara Mahadewa

MINGU KE-5 :
3. UKUR
Lunau

MINGU KE-6 :
4. BHATARA MAHADEWI

Shafar
Cap It: Gwe
Urip: 5 + 8
Kajeng
Pasah
Maulu

Duka
Indra

Watek : Bata - Ulor
Lintang : Lawean
Gajih : 16
Mkara Sari
Sasih Kiptu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 5 + 9
27 Kajeng
28 Pasah
29 Maulu

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Gajah
Lintang : Gajih
Gajih : 16
Mkara Sari
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 5 + 9
27 Kajeng
28 Pasah
29 Maulu

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Gajah
Lintang : Uluksu
Kumbia Rasi
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 5 + 9
27 Kajeng
28 Pasah
29 Maulu

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Uluksu
Kumbia Rasi
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 5 + 9
27 Kajeng
28 Pasah
29 Maulu

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Wong - Gajah
Lintang : Kula Sungsang
Kumbia Rasi
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 5 + 9
27 Kajeng
28 Pasah
29 Maulu

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Bata - Ulor
Lintang : Uluksu
Kumbia Rasi
Sasih Kewulu

Shafar
Cap It: Gwe
Urip: 4 + 5
Pasah
Tungah

Duka
Gajih

Watek : Bata - Ulor
Lintang : Lawean
Gajih : 16
Mkara Sari
Sasih Kiptu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

Duka
Gajih

Watek : Bata - Ulor
Lintang : Lawean
Gajih : 16
Mkara Sari
Sasih Kiptu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

24 Rabiulawal
25 Cap It: Gwe
26 Urip: 4 + 5
27 Kajeng
28 Pasah
29 Tungah

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

Watek : Suku-Ulor
Lintang : Kelpas
Lintang : Kelpas
Sasih Kewulu

Shafar
Cap It: Gwe
Urip: 4 + 5

写真 10 2013 年のバリ・カレンダー

7. 結論

元号は中国に端を発する短期的紀年法であり、皇紀はキリスト教やイスラームの長期的紀年法を意識して採用された近代の産物である。皇紀は明治6年の改暦と軌を一にして導入された。明治改暦は中国文明圏からの離脱をはかり、欧米文明圏への乗り換えを象徴するものであった。しかしながら、皇紀という日本独特の紀年法を活用して、国家主義あるいは帝国主義を扇動するツールと化す場合もあった。新暦の普及は明治政府の主導する政策と合致し、内地はもとより外地においてもその徹底がはかられた。しかし、実態は一樣ではなく、紆余曲折も多々あったにちがいない。本論文はそのきっかけであり、本格的な研究は今後にゆだねるほかない。

本稿は、外地の朝鮮と台湾、それに占領下のインドネシアで元号と皇紀がどう使われたかについて、その一端を垣間見たにすぎない。しかしながら、少ない事例とはいえ、暦が帝国というシステムを維持管理した際、どのような役割を果たしたかについて多少の光を当てることができた。

そこで明らかになったことは、元号の影が意外に薄いことであり、皇紀が西暦と対抗する存在として、帝国主義的な状況下ではその存在が次第に強調されていったことである。しかし、朝鮮と台湾では敗戦とともに元号と皇紀は朝鮮では檀紀、台湾では民国暦に取って代わられた。奪われた主権の回復を意味する「光復」の喜びが1946年の暦に反映されていることは印象的である。その一方、無条件降伏にもかかわらずインドネシアでは独立宣言にまで皇紀がつかわれたことは、情性的とはいえ衝撃的でもあった。しかも、その余韻が現代まで持続していることも紀年法の観点からは見逃せない。メディアとしての暦は国家主義や帝国主義の情報を媒介してやまなかったし、暦はいまでもさまざまな思想や宣伝を伝達するツールとして機能しつづけている。

〈謝辞〉

韓国の国立民俗博物館から画像や情報の提供を受ける際、国立民族学博物館名誉教授朝倉敏夫氏に便宜をはかっていただいた。記して謝意を申し述べたい。

参考文献

- 奥野卓司, 2009, 『情報人類学の射程－フィールドから情報社会を読み解く』岩波書店.
- インドネシア日本占領期史料フォーラム編, 1991, 『証言集－日本軍占領下のインドネシア』龍溪書舎.
- 斉藤鎮男, 1977, 『私の軍政記』日本インドネシア協会.
- 鈴木恒之, 1977, 『世界現代史 5 東南アジア現代史 I 総説・インドネシア』(第 V 章) 山川出版社.
- 総山孝雄, 1998, 『ムルデカ! インドネシア独立と日本』善本社事業部.
- 中牧弘允, 2019, 『世界をよみとく「暦」の不思議』イースト・プレス.
- 中牧弘允編, 2017, 『世界の暦文化事典』丸善出版.
- 水野直樹, 1986, 「光復節」『朝鮮を知る事典』平凡社.
- 游舒婷, 2017, 「官暦と民間暦を通してみる伝統と近代の交錯－日本統治時代の『台湾民暦』と国民党統治時代の『農民暦』を中心に」『非文字資料研究』14, 321-347.
- 嘉原優子, 2017, 「インドネシア共和国 (バリ)」中牧弘允編『世界の暦文化事典』丸善出版.

Calendar as Medium:

Gengō and *Kōki* in Korea, Taiwan, and Indonesia

ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate the use of *gengō* and *kōki* in calendars that were distributed in Korea, Taiwan, and Indonesia in the first half of the 20th Century from an “information anthropology” perspective. *Gengō* means the “era name” or “year name” in the Japanese calendar scheme, which is patterned after the Chinese system. A “one reign, one era name” system has been adopted since 1868. On the other hand, *kōki*, which literally means “emperor year,” is a Japanese system of counting years starting from the first Emperor Jinmu’s accession to the throne, which has been calculated as BC 660.

In Korea and Taiwan, under Japanese rule, *gengō* such as Taishō and Shōwa were used along with the Gregorian year and the *kōki* year. In Indonesia, under Japanese occupation, the use of the *kōki* year was declared in March 1943; further, the Proclamation of Indonesian Independence (in 1945) used the *kōki* date August 17, 2605.

This paper aims to shed light on the function of *gengō* and *kōki* in the administrative system of the Japanese Empire overseas. An analysis of examples in pre-war Korea and Taiwan reveals that *gengō* seemed to have lesser impact than *kōki*, which was emphasized as a competing system with the Gregorian calendar. Following the defeat of Japan in 1945, both *gengō* and *kōki* were abolished. Instead, they were replaced by the Tangun year and the Republic of China (Minguo) calendar in Korea and Taiwan, respectively. It is impressive that the joy of liberation was portrayed in a Korean calendar of 1946.

Calendars, serving as media, propagated information on nationalism and imperialism powerfully in the early 20th Century and continue to function as an influential tool to convey ideas at a mass level.

Key Words: calendar, *gengō*, *kōki*, media, information anthropology, Korea, Taiwan, Indonesia